音楽科研究主題

『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む』

～音楽を形づくっている要素をもとに，表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成をとおして～

小林　美佳

1　テーマ設定の理由

学習指導要領において，指導のねらいや手立てを明確にし，生徒が感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を大切にした学習指導を行うことが重視されている。

このことを受けて，音楽科では，音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受し，それをもとに，生徒一人一人が試行錯誤して表現したり，主体的に味わって鑑賞したりする学習の充実を図る。

そのために，個別学習や少人数によるグループ活動などをとおして，生徒自らが思考・判断し，表現を工夫したり，聴いた音楽のよさや美しさなどを相手に伝えたりすることのできるような学習を展開する。このことにより，音楽的な感受を基盤として，思考・判断・表現する一連の過程を重視した学習を推進するための指導及び評価の在り方を研究することが本研究のねらいである。

2「音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力」の育成

本研究では，「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核とし，それを生かした表現や鑑賞の学習を展開する。その際，個人または，小グループによる活動を重視する。表現の学習では，自分なりの表現の在り方をイメージし，試行錯誤しながら音楽を工夫して表現する。また，鑑賞の学習では，自分なりの音楽のとらえ方やイメージ等を大切にしながら音楽を聴いたり，仲間とともに音楽に対する意見交換を行ったりする。そこで身に付けた力をもとに，各題材の中で，表現活動や鑑賞活動において，生徒が音楽に対する自分の思いやイメージを表現につなげるため，音楽用語などの音楽に関する言葉を用いて表し，話し合いができるような活動を行う。こうした学習過程により，「音楽を思考・判断・表現する力」が育つものととらえ，感受の力を高め，『表現領域と鑑賞領域の関連を図った授業づくり』を展開していく。

3　音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）ことの重要性

我々教師が，音楽を志す動機となった要因には様々あるであろう。義務教育時に受けた授業の印象がきっかけとなってもいる。また，幼少よりお稽古ごととして，ピアノなどの演奏活動，そして小中学生時に吹奏楽や合唱等の活動などにかかわった経験にもよるであろう。いずれにしろ，音楽的環境に身を寄せ，ある一定時期において継続的に取り組むことにより，音楽のすばらしさを感受した経験を誰もがもっている。我々が，音楽に感動し，様々な情動が喚起されるのは，こうしたバックボーンの中で“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力が身に付いているからである。この“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力”が身に付いていることによって「音楽のすばらしさ」を感じるのである。

「音楽のすばらしさを感じる」とは，音楽をより深くとらえることができることだといえる。例えば，和声的な進行において半終止のあとには，終止感を感じ取れる。また旋律においてもその基調とする終止音への帰属を予感することができる。また，楽曲の全体構想を聴きながら内声や副旋律の存在，そして低音の動きや音色，テンポの変化など，楽曲の中にちりばめられた様々な音楽的要素を感じ取りながら音楽を感じ取り，また表現している。このように「音楽のすばらしさを感じる」ためには“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力”が不可欠な要素となる。

4　全体研究との関わり

次の全体研究の具体的な視点Ａ～Ｄとかかわらせて授業実践を行い，検証を行った。

Ａ生徒に身に付けさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

全体研究では，教科を学ぶよさや生徒につけさせたい力を明らかにし，「自ら問う力」を育むことを目指している。「自ら問う力」とは，課題に対して解決するためにはどのようにしたらよいか，試行錯誤しながら考える力である。

これを受けて音楽科では，音楽のよさや美しさを理解するために，生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり，音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考える。この力を身に付けさせるために，「音

楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核として，音や音楽に関心をもち，音楽の特徴や表現の工夫に気づき，音楽のよさや美しさを感じ取る。そして感じ取ったことをもとにして，思いや意図をもって，表現を工夫したり鑑賞したりするといった学習過程を重視する。この学習過程の中に，生徒に「問い」をもたせながら，主体的に音や音楽にかかわる場面を仕組むことによって，前述した生徒に身に付けさせたい力をさらに高めることができると考える。

Ｂ生徒に問いをもたせる教材のあり方

「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」が効果的にできるような教材開発を行う。具体的には，音楽を形づくっている要素の働きに着目させるための聴取教材を制作したり，演奏家による演奏を録音あるいは録画し編集したりすることをいう。さらに「目には見えない音や音楽」の仕組みを細かく，深く，わかりやすくとらえさせるために，聴かせ方を工夫したり，聴き取った音や音楽の可視化を図るための手立てを講じたり，といった教材を最大限に生かす方法についても模索する。

Ｃ生徒に問いをもたせるための教師の役割

生徒が「問い」をもって学習する具体的な学習場面の一例として次のことが挙げられる。歌唱表現の学習において，「この旋律がはずむ感じがするのはなぜだろう？」と音楽に関心をもち，「付点のリズムを用いていることによってはずむ感じがするのだ」と音楽の特徴に気付く。そして「付点のリズムを生かして歌うためにはどのようにしたらよいか？」と表現の工夫を考える。このように「問い」をもちながら，感性を働かせながら音や音楽と直接かかわる学習を中学校３年間で積み重ねることによって，音楽のよさや美しさを感じ取ることができるようになるであろう。そのためには，教師が各題材において，指導のねらいを明らかにし，ねらいに即した指導内容や指導計画を整理し，すべての生徒が何を学習したらよいのかが明確になるようにしなければならない。生徒が与えられた題材の中から，問わずにはいられない状況をつくることで，生徒が自ら考え，自分なりの感性で答えを見いだしていく過程を教師側がサポートしていくことが重要となる。

Ｄ生徒の問いをどう見とるか（表現活動・評価）

個別学習や少人数グループ学習を取り入れ，生徒一人一人が思考・判断・表現している状況の観察（生徒の発言）やワークシートの記述内容から把握する。具体例として，歌唱表現の学習において，聴き取った内容をもとにイメージをふくらませ，それを表現するためにどのような工夫をしているかについて楽譜への記入や言語を通して表している状況から見とることが挙げられる。

５．評価規準の作成と評価方法の設定について

音楽科における学習評価では，表現領域の学習状況を①「学習への関心・意欲・態度」②「音楽表現の創意工夫」③「音楽表現の技能」の３観点で，鑑賞領域の学習状況を①「学習への関心・意欲・態度」④「鑑賞の能力」の２観点で評価する。平成22年11月の国立教育政策研究所教育課程研究センターから公表された「評価規準の作成のための参考資料」を参考にして，題材の評価規準を作成し，生徒の『音楽を思考・判断・表現する力』の実現状況を見取る。

また，評価方法については，生徒に音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるために，一つの要素に注目させ比較聴取させるなどして，「見えにくい学力」といわれる感受している状況を観察（生徒の発言も含む）やワークシートの記述，発表内容から把握したい。

６．これまでの研究経過（成果と課題について）

平成17年度から平成19年度までの全体研究では，生徒一人一人が，本質的で重要な事柄をきちんと習得することにより，他の事柄においても様々な関連を意識し，自らが試行錯誤しながら「かかわり」を見いだすことをねらいとして研究を行った。その研究の成果と課題をふまえ，平成20年度から平成22年度までの全体研究では，生徒一人一人が見いだした「かかわり」を，生徒自身が振り返り，整理し，発信することができることをねらいとして研究を行った。

音楽科では，「かかわり」とは，音楽を聴く活動を通して，音楽を形づくっている要素を感じ取り，そこで感じ取ったことを表現活動及び鑑賞活動に生かすことだととらえてきた。一つの楽曲は様々な音楽的要素がかかわり合って

構成されている。それがわかることによって音楽表現や鑑賞に対する意欲が高まると考える。この考えをふまえて，生徒が感受を基盤として「かかわり」を意識し，表現領域と鑑賞領域の関連した題材構成に取り組んできた。そして，音楽科として育む学力を把握するため，その前提となる題材構成の工夫・改善を図り，指導と評価の在り方などについて実践的に研究を進めてきた。

（１）成果

①「歌唱と鑑賞」，「器楽と鑑賞」，「創作」の題材構成とその評価の在り方について実践検証を行うことができた。

②①のそれぞれの題材において，個別学習や少人数グループ学習を仕組むとともに，学習シートなどの評価方法を工夫することによって，生徒一人一人が，音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しているか，さらに，それらに基づきながら，どのように表現を工夫するかについての学習の実現状況を把握することができた。

（２）課題

①生徒自らが，主体的に音楽の構造などをとらえ，雰囲気や特質などを感じ取り，試行錯誤しながら表現を工夫したり，音楽のよさや美しさなどを味わって聴いたりすることができるような題材構成や学習指導の展開などについて一層の整理が必要である。

②目標の実現状況を把握するために，ねらい，教材，学習活動の展開などに応じて，適切な評価規準を設定するとともに，観察，ワークシート，演奏，批評など評価方法を一層工夫・改善していく必要がある。

７．今年度の具体的な研究内容

（１）研究対象：第２・３学年

今年度は，これまで積み重ねた授業実践をもとに，表現活動における生徒の見とりを含めた研究を進めてきた。昨年度は歌唱表現の工夫を目的とした授業を提案したが，今年度は事前研究会においては，有節歌曲を用いた歌唱表現の工夫を，中等教育研究会の授業では歌唱を用いた創作活動について提案した。本研究において，生徒の見とりの機会となるのは授業で次のいずれかの状況を仕組んだときである。

①解決したくなるような課題に直面させる。

②自分の考えや他人の考えを表現させること。

③他者との相互作用。

以上３つの状況のうち，いずれかをふまえた授業を展開した。

（２）成果の検証・方法等

①については，実際の授業での課題設定が重要となる。例えば歌唱の表現活動を行う中で，これまでの聴取活動を生かし，生徒の予想に反する意外性をもった聴取教材や，「なぜこのような表現をしているのだろう」と疑問に思うような聴取教材を使用していく。聴取活動を行っているときの生徒の様子を観察したり，ワークシートへの記述を確認したりすることで見とりを行う。

今回の提案授業では，生徒を「オブリガートを創作する」という主課題に直面させる。まずは，既習事項である主要３和音を用いて，和音の構成音から音を選択して簡単な旋律にする過程を仕組む。３つの音からひとつ選択するという取り組みやすい活動を行い，「どの音を選んだらいいのだろう」「この音を選ぶとどんなハーモニーになるのだろう」といった問いにつなげていく。創作を苦手とする生徒にも「できた。」と感じる段階的な過程を用意することで，自分の力で課題を解決したいという意欲をもたせていく。

②③については，グループ活動における生徒たちの話し合いの様子，そこから生まれる表現の工夫，また他のグループの発表から感じ取ったこと等を総合して見とりを行う。まずは個人での思考を促し，それをもとにグループ活動を行うことで，さらなる思考の進展が予想される。

また，その相互作用によってもたらされた成果を実技で表現することにより，生徒の思考の変容を見とり，題材ごとに評価を詳細に行えるようにする。その後，鑑賞活動を仕組んだ場合，感じ取ったことを自分の言葉で表現し，味わうことにより，学習前後の変容を見とることができると考える。

今回の提案授業では，個々で創作した旋律をグループの仲間と歌唱することで，さらによりよい旋律へと仕上げていく過程を重視する。単純な２分音符の旋律からリズムの変更や経過音・異音等の挿入を経て，オブリガートと呼ぶにふさわしい旋律に仕上げていく活動を段階的に仕組み，「どう工夫すればよりよい旋律になるのだろうか」「もっとよい方法はないだろうか」という問いをもたせていく。その過程にグループでの活動を取り入れることで，他者の

考えにふれ，自分では気づかなかった改善点や，よりよい旋律づくりのための方策を知ることができると考える。このような段階的な取り組みをとおして，生徒一人一人が自分だけの作品をつくりあげられるようにしていきたい。

具体的な見とりの方法としては，それぞれの段階においてワークシート・楽譜等への生徒個々の書き込み，グループ活動における話し合いの記録，録音した音声，歌唱表現の発表時の映像記録等を利用することが考えられる。これらの方法を検証し，３年間の研究のまとめとする。

８．研究のまとめ

（１）生徒に「問い」をもたせる授業（視点Ａ～Ｄ）について

①教材について

音楽科では，生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり，音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考え実践を行った。これらの力を身に付けるためには，「どんな表現方法があるのだろうか」「この曲にはどんな工夫がされているのだろうか」などといった問いをもたせることが必要となる。そこで，生徒に感受させるもととなる聴取教材にこだわって，教材の工夫を行った。聴取教材は，比較的平易で親しみやすい旋律であること，多くのバリエーションがあることなどを条件とし，その時の題材にもっとも合うと思われるものを選曲した。

例えば，歌詞の内容から歌唱表現を工夫する授業では，生徒の予想に反するような表現の工夫をしている楽曲を選ぶことで，「どうしてこのような表現をしたのだろう」「この表現をすることでどんな効果があるのだろう」といった問いをもたせることにつながった。また，オブリガートの創作の授業では，もとの旋律にハーモニーをつけたもの，オブリガートをつけたものと変化していく楽曲を聴かせ，工夫を加えることで曲の雰囲気が大きく変わることを感じ取らせることができた。聴取教材の効果的な利用は，生徒が問いをもつきっかけとなり，その後の音楽活動に大きく影響することが実証できた。「どんな工夫がされているのか」を考えることで自分の作品を見直すことができ，聴取教材の工夫を真似したり，それを利用してさらに工夫を考えたりする姿が見られた。適切な教材によってきっかけをあたえることで，生徒の「やってみたい」「こんな作品にしたい」という意欲を向上させることにつながると考えられる。歌唱や創作などの実技活動に聴取を加えることは，生徒が思いや意図をもって音楽活動を行う上で必要であると言える。

ただし，題材や主となる教材（楽曲）によっては，教師が意図するような聴取教材がない場合も考えられる。その場合，教師が自ら演奏したり録音したりして教材を作らねばならない。しかしそれには，録音機器が揃っていること，よりよい教材づくりができる環境であることが最低条件となる。また，ハーモニーを聴かせたい場合などは，一人で同時に２パートを歌うことは不可能であり，学校に音楽科が一人しかいない場合には対応しきれないという困難さもある。自作教材の制作については，今後もよりよい手法を考えていく必要がある。

また、ここで留意すべきなのは，聴取と鑑賞の違いである。聴取活動はあくまでも，授業のねらいを明確に生徒に伝えるためのひとつの手段であり，鑑賞領域での評価にはつながらない。鑑賞教材は，授業の最初に入れる場合は，生徒に授業のねらいを気づかせることができる。最後に入れる場合，ねらいに合った楽曲を聴かせることで，より音楽のよさを味わうことができ，まとめとしても効果的である。鑑賞教材を組み合わせて使用することで，音楽表現がより深まると考えられる。

②教師の役割

効果的な聴取と同様に重要となるのは，教師の役割である。音楽科では，グループでの活動を取り入れることが多い。個人で考えたことを仲間と共有し，さらに高めていく過程が，音楽活動を深めるうえで効果的と考えられるからである。しかし，グループ活動を進めていくにあたり，教師がそれぞれのグループを巡回していると時間がかかりすぎ，生徒の活動が停滞してしまうという問題点もある。そこで，教師が適切な声かけを適切な時間に行うことが必要となる。巡回した中から授業のねらいに則した工夫を行っている生徒を取り出し，全体に経過を見せることで仲間の考えた工夫を知り，「自分はこうしたい」という意欲を高めていく。教師の声かけが生徒どうしの相互作用を促し，よりよい音楽活動を展開するきっかけとなると考えられる。

③生徒の見とり

生徒の問いを見とることについては，今後も研究が必要である。見とりの方法として有効と考えられるのは，ワークシートの工夫と機器を使った記録である。ワークシートは，生徒の変容を見とりやすいよう試行錯誤を重ねて作成した。歌唱表現の工夫では，音楽記号を記入する部分と，自分の思いや意図を記入する部分を同じページに配置し，

楽譜と共に確認できるよう工夫した。創作では，生徒の工夫を見返すことができるよう，五線譜を上から貼り付けて重ねていく方法をとった。ワークシートの工夫により，生徒が行った音楽活動の結果を見とることはできるが，過程を見とることは難しい。その補助として録音機器によるグループ活動の記録，ビデオによる生徒の発表の録画等を行ったが，生徒全員の思考の過程や，工夫を見とることは困難である。また，これらの機器を，生徒全員が見とれるだけの数を揃えること，一つの教室で複数のグループの音楽活動を見とることなど，困難な状況も考えられる。

（２）今後の研究について

以上のことから，「自ら問う力」が生徒についたとはっきりと言い切れるだけの見とりができていない。Ａ～Ｄの視点をもとに行った工夫によって，生徒が「考えること」から逃げることなく，課題と向き合っている様子は見られたが，「自ら問う」状態にまで高まっているとは言い切れない。今後も継続した授業づくりを行い，見とりの方法を研究していかなければならない。教師が毎日の授業ではっきりとしたねらいをもち，それに応じた教材選択を行う。生徒が常に課題に取り組む意欲が高まるような工夫を重ねていくことによって，生徒の「自ら問う力」を育成することにつながるのではないだろうか。生徒が「なぜだろう」「どうしたらできるのだろう」と自ら考え，「できた」ことの喜びを感じられるような授業づくりを，今後も研究していきたい。

本研究で行ってきたことは，普段の授業で当たり前に取り組んできた工夫を改めて見直し，事例集や指導案を利用して形にしたものだと言える。教師が自らの授業を見直し，新たな発見をしたり，これまで行っていた方法の有効性を確認したりできたことは，大きな一歩ではないだろうか。本研究で得た生徒の変容の様子，教師の意識の変化を生かし，よりよい授業づくりを目指して，今後も研鑽を続けていきたい。

〈引用文献〉

・中学校学習指導要領解説音楽編　文部科学省

・「これからの音楽教育　音楽教育における学力をどうとらえるか」大熊　信彦著
（中等教育資料平成22年４月号～平成23年６月号）

〈参考文献〉

・中学校音楽科の指導と評価　西園　芳信　監修　暁教育図書（平成21年）

・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要（平成23年～24年度）